読書

BOOK REVIEW

県図書館に行こう!!

こんな情報が待っている

幻のプロジェクト

運河、鉄道…熱意の記録

「日本横断運河」「国鉄下呂線」「信富鉄道」―。すべて、実現することなく夢で終わった巨大プロジェクト。今では知る人も少なく、残された資料もまた少ない。しかし、県図書館には当時の様子をうかがい知ることが出来る資料がある。

「日本横断運河」は、伊勢湾から琵琶湖を経て敦賀湾に抜ける、太平洋と日本海を最短距離で結ぶ大運河計画。一九六三(昭和三十八)年一月二十七日の岐阜日日新聞(現岐阜新聞)に大きく報じられた。建設促進を図る団体が作成した冊子『日本横断運河』では、建設の具体的方法や費用の概算を記すとともに、運河の建設は平清盛の時代から脈々と続く構想である―とも。また『日本横断運河開発計画調査報告書』と題する五百ページ余りの報告書も残されており、詳細に調査検討されたことも分かる。

「国鉄下呂線」は、中央本線中津川駅と高山本線下呂駅間約四十八キロを結ぶ計画。二二(大正十一)年に予定線に編入され、その後、期成同盟会が発足して運動を開始。六二年に工事線昇格、七五年には付知―下呂間の工事許可が下りたが、オイルショックなどのあおりで着工が見送られた。

期成同盟会は『国鉄下呂線早期建設の実現を』と題したパンフレットを作って沿線の産業と観光名所を紹介するなど実現に向けたPRに乗り出したが、八八年に会は解散し、計画は実現しなかった。解散時に最後の事業として『活動の記録』が作成され、長年に渡る交渉の足跡を残している。

「信富鉄道」は、旧国鉄神岡線から平湯・安房峠を貫き、長野県の旧安曇村(現松本市安曇)に出て松本電鉄の島々までを結ぶ計画。六六年に作成された『国鉄信富線建設促進に関する陳情書』では、北陸地区から首都圏への最短鉄道となり産業文化の発展に大きく寄与すると説明している。この陳情書を作成した信富鉄道建設促進同盟会の活動は数年間は続いたようだが、計画が実現することはなかった。

幻に終わった3つのプロジェクトの資料

―岐阜新聞社提供―